

世界仏教文化研究センター

リレーエッセー

コロナ社会で共に生きるために

No. 7

仏法が教える「with コロナ社会」の積極性



世界仏教文化研究センター 基礎研究部門
リュウシュ マルクス（博士研究員）

今年の初めにはまだ半分うわさじみて聞こえた「コロナ」は、3・4月にかけて活発になり、緊急事態宣言という状態までにいたりしました。あるドイツのニュースキャスターが言ったのは、今の世界が常に、戦争・旱魃・金融危機のような多数の危機と当面しているが、今回のコロナウィルスの流行の特徴は全世界・全階級までに影響を与えるところにある、ということでした。不安や孤独などマイナスしか感じられない状況にあることは間違いありませんが、こうした中でいかに生きるかということが、私たちの新しい課題になりました。

その中、比較的早い段階で「with コロナ社会」というスローガンが宣言されました。私にとっては、その言葉がとても印象的で、非常に建設的な表現だと思いました。その中に含まれている大事なメッセージは二つあると思います。1点目は、コロナを認める、ということです。単純に聞こえるかもしれませんが、世界政治での発言を見ると意外と難しい点のような気がします。2点目は、コロナによる制限のみに注目するのではなく、コロナを前提として、そこから必要に応

じて新たな生活を考えようということです。本エッセーでは、仏法が私に今まで教えてくれたことと対照し、その2点について考えたいと思います。

(1) コロナを自覚する態度

仏教の最終的な目標は、自我を超えた境地にいたる（涅槃に入る）ことまたは全ての生物のために生きること（慈悲の実現）だと思っています。宗派によって、その中の方法などは違いますが、その目標を達成するための条件がまず自分と自分がある境遇をしっかりと見つめることです。仏教はそうした意味で自己意識と自己責任を要求する宗教だと思っています。そこで、コロナは非常に危険な事実だと自覚した上で、自分は他の人と比べればどのような立場にいるかを考えなければならぬとよく思いました。ニュースを見れば、自分の悩みと比較にもならない不幸がどれだけ世の中に多いかは予想することができます。医療機関が対応しきれなくなった国や、家族を失ってきちんと別れを告げることができない人など、事実としてコロナで苦しんでいる人が多くいます。仏教が求める自我の追求は、自我の問題を大きくするためではなく、逆に自分の些細さに気づき、そしてそれは謙遜に繋がると思っています。しかし、本当に苦しい人は、それを苦しきとして受け止めなければなりません。

(2) コロナを積極的に生きる態度

では、自分の立場を考え直し、苦しいことを否定せずに、自我から生まれたものを放棄した上で、いかに前向きに生きればいいのか。在宅勤務の初期に、私がいる部門の部門長に大変励まされた言葉がありました。それは、コロナになって心配の多い時期になったかもしれませんが、別の形でより活発な研究活動も可能ではないか、ということでした。その言葉の根拠にあったのは、コロナが1・2ヶ月内で終息しないはずだという(1)で話したような“自覚”でした。ただ、それで終わるのではなく、コロナだからこそできることがあると強調してくださいました。そのため、今までできなかったことや疎かにしてしまったことがあるので、まずはそれに励んで、新たな成果を出すように頑張ろうと思いました。そこで、最澄の「一隅を照らす」という有名な言葉を思い出しますが、この言葉は今現在の自分を一生懸命生きるべきだと教えてくれます。自分に課せられている仕事で全力を尽くせば、そこから周りにも光が放たれていきます。そして、私も常に「他隅」からの光を浴びることで元気を頂戴しています。私はワクチンを作る能力がありませんし、寄付できるほど十分な財産もありません。しかし、在宅中の業務やオンライン授業といった意味で貢献できることが多くあり

ます。一つ一つは些細なことですが、それに励む甲斐が必ずあります。そうした自分なりの課題は、誰でも持つと思います。

そして、「with コロナ」という表現に含まれているように、コロナにおける生活の時機相応アップデートが要求されているのではないのでしょうか。コロナは、必ずしも転換期だと重く受け止める必要がありません。歴史を振り返ってみれば、疫病は逆に定期的に起こるものだということが分かります。ただ、その状況をきっかけに、コロナが終息した後にも通用するような新たなことと既存のことの改善を考えなければなりません。いわば、どのような混合形式が可能なのかを考える必要があると思います。今解決するしかない問題を抱えているような、実際に困っている人も多くいます。しかし、デメリットだけに注目すれば、何の成果も生まれてきません。困っている人は、それを自分だけで解決しようとしなくて、周りにいる人と話し合うことができます。また、周りにいる人たちは、協力し合う「社会」を創造する責任があります。

ただ、いくらコロナ社会を積極的に生きようと思っても、限界があります。物質的な問題もあれば、自分の非合理性による悩みもあります。私にとって親鸞の教えの一つの魅力は、凡夫が孤独にんげんに陥ったり、自分の勝手な思いに浮かれたり生活を送るということを否定しないことです。親鸞の教えは、それを勧誘するわけではありませんが、凡夫がいくら頑張っても挫折するときがあると許してくれる優しい面があります。我々は、その教えに学んで、悲しむときに悲しみ、ただそれに溺れることなく、終息という絶対的に確保されている救いに向けて、自分なりの貢献を果たしながら、互いに助け合う「with コロナ社会」を新たに創造していきましょう。

【著者紹介】

専門：日本仏教、宗教空間、聖人伝

著書・論文：『*Argumente des Heiligen: Rhetorische Mittel und narrative Strukturen in Hagiographien am Beispiel des japanischen Mönchs Shinran* (聖なるものの論弁：聖人伝における修辞法的手段と物語論的構造、日本僧侶親鸞を事例に)』(Iudicium, 2019)、「The structure of revelation in Shinran's teachings: Myōgō 名号 and the aesthetic meaning of Amida's name」(*HŌRIN* 19, 2018)、「親鸞とハイデガーとの『対話』－『自然』の概念を巡って－」(『人文學報』110, 2017) その他